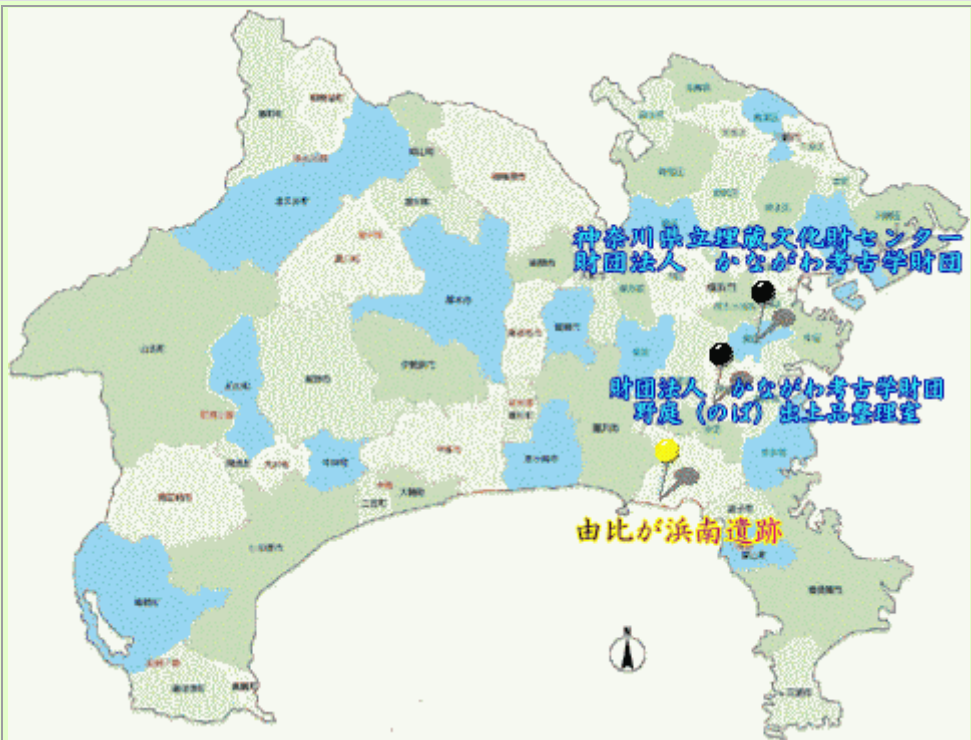


ゆいがはまみなみいせき

由比が浜南遺跡

所在地 鎌倉市
由比が浜

時代 中世
近世



県土整備部藤沢土木事務所による、長谷常磐線街路整備事業に伴い発掘調査を実施しました。

調査地点は、江ノ電長谷駅の南方約150m、由比が浜の汀線（ていせん）から約90mのあたりで、海岸に面した砂丘内に位置しています。調査面積は420㎡で、平成14年12月～平成15年1月と平成15年3月～4月の2回に分けて、延べ4ヶ月間調査を実施しました。調査区は30m×14mのほぼ長方形で、これを2分割



▲井戸枠確認状況

して最初の2ヶ月で南半部を、後の2ヶ月で北半部の調査を行いました。

由比が浜南遺跡はさまざまな様相が見られる中世の大規模な遺跡ですが、今回の調査地点はこの遺跡の範囲の西端部に当たります。遺跡には風成砂層（ふうせいさそう）が2mほど堆積（たいせき）しており、その下に遺物包含層（いぶつほうがんそう）が存在していました。包含層は北寄り、つまり海とは反対側に偏って存在しており、調査区の7割ほどを覆っていました。包含層を形成する土層は黒色腐植土を多量に混入した砂質土です。また、遺跡全体の地山や遺構覆土（いこうふくど）などもすべて砂層あるいは砂質土層でした。

遺構は調査区の北寄りを中心に、井戸址1・土坑（どこう）10・集石（しゅうせき）状遺構5が検出されました。井戸址は直径2.5m、深さ1.6mほどの不正円形で、確認面から80cmほどの深さの所（標高1.5mほど）に木枠が配置され、厚さ1cm～2cmほどの側板（そくばん）が1m弱の正方形に組み合わさっていました。側板は長さは70cm、幅30～15cmほどでした。この側板の倒壊防止のため、内側に2段にわたって棧（さん）が釘でとめられていました。側板のつなぎ目部分の裏側には、さらに板が当てられていました。掘り方部分から内部への砂の流入を防ぐ目的があったとみられます。

遺物は包含層から、かわらけ・陶磁器（とうじき）・土製品・石製品・鉄製品・骨角器（こっかくき）・人骨・獣骨などが出土しています。

年代は13～14世紀代のものが中心です。獣骨には切断痕などの加工痕を持つ



▲井戸棧確認状況



▲骨角器（疑似貝）出土状況

ものが多数みられます。陶磁器は国産の瀬戸（せと）美濃（みの）・常滑（とこなめ）などのほか、輸入品の青磁（せいじ）も出土しています。注目されるものとしては数百個にも上る土錘（どすい）と鹿角製の擬似餌（ぎじえ）があり、漁業との関連が想起されます。